

# 終戦の前後に出生した学生の 現在迄の保健状態について

## (I) 出生から幼児期迄の実態

市 川 民 慈 子

### I 緒 言

終戦(1945年)の前後に生れた新生児も現在は大学の2年生或いは3年生に成長し、ある者達は本年成人式を迎えた。

第二次大戦の終結に伴ない、国土は甚だ狭められ、加うるに海外在住の引き揚と復員により、人口は500余万人の社会増加を生じた<sup>(1)</sup>。当時の日本の状況は悲慘の一言につき従ってその生活環境は食糧事情をはじめ住宅問題も被服関係も最低に悪化して、国民生活は窮乏そのものであったことは既知の如くである。一方学問的にもこの数年間には研究発表や学会は殆んど開催されず、学会雑誌も廃刊され又国家的統計等も欠除しているものが多く、不明の点が多々みられる。彼等はこのような混乱の時期に出生し、赤坊から幼児時代をたくましく、くぐりぬけた人達である。そして児童期を経て青年前期にある現在、大学生として勉学と身体造りに青春を楽しみながらいそしんでいるわけである。

そこで述者は彼等がこの20年余を、如何なる保健状態をへて今日に到達したかを知らんと欲し、幸い神戸女学院大学生309名から、興味ある健康記録調査をうることが出来たので、今回は紙面の都合上、第1報として先ず出生から幼児期迄の実態をここに報告する次第である。

### II 調 査 方 法

出生から大学生生活を営む現在迄は如何なる保健状態をへてきたかを観察す

るために45項目余にわたる発問を行ない、記名方式により調査書提出迄に2週間をもうけ、主観的に不明の点は保育者に問合せなど出来る限りの正確性を期した。紙面の都合上、発問内容の記載を省略する。

本調査への参加者は英文学科3年生と2年生の半数、社会学科3年生全員、家政学科2年生と3年生の全員、音楽学科3年生の全員で、うち1943年生れの学生を除いた309名である。当大学には終戦の1945年生れが256名、1944年生れが260名、1946年生れが271名在籍している。従って今回の1944年生れ127名はその48.8%に当り、1945年生れ147名は57.4%、1946年生れ35名(1月から3月迄に生れた者)は12.9%にあたる。

### Ⅲ 調 査 成 績

#### (1) 調査人員の構成

調査に応じた309名の生年区分と学科別の実態は次の如くである。

第1表 神戸女学院大学生309名の調査人員構成

生 年 科	文 学 部			音楽学部	計 (名)	%
	英文学科 (E)	社会学科 (S)	家政学科 (H)	音楽学科 (M)		
1944	39	50	36	2	127	41.1
1945	47	32	51	17	147	47.6
1946	13	0	11	11	35	11.3
計	99	82	98	30	309	100

1944年生れの者は127名、1945年(昭和20年)生れの者は147名、1946年生れの者は35名である。これを学科別にみると、英文学科生99名、社会学科生82名、家政学科生98名、音楽学科生30名となる。

#### (2) 人口上からみた出生地の分布状態

次表の市町村とは彼等の出生当時の実態であり、現在その多くが市に発展したことは言をまたない。

第2表 神戸女学院大学生 309 名の人口上からみた出生地の分布状態

分 布 状 態	1 9 4 4				1 9 4 5				1 9 4 6			計 (名)	%
	E	S	H	M	E	S	H	M	E	H	M		
	生 年 学 生 別												
大都市	15	20	15	1	9	8	10	1	5	2	2	88	28.5
小都市	12	14	8	0	16	10	12	5	4	2	4	87	28.1
町	6	10	10	1	17	10	19	6	1	1	3	84	27.2
村	6	5	3	0	5	4	10	5	3	6	2	49	15.9
其 他	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.3
計	39	50	36	2	47	32	51	17	13	11	11	309	100
	1 2 7				1 4 7				3 5				
外地出 産者数	0	4	0	0	4	5	6	0	2	0	0	21	6.8

大都市の生れが最も多く88名(28.5%)を占め次に小都市87名(28.1%)、町84名(27.2%)、村49名(15.9%)、其他1名(0.3%)等々の順である。都市に生れ都市に育った学生が多い事が推定される。尚外地生れは21名(6.8%)である。

### (3) 上記出生地と生活上の結びつきとの関係

出生地を本籍地、当時の現住地、或いは疎開地等々の見解から実態を分類すると次表の如くである。

第3表 神戸女学院大学生 309 名の出生地と生活上の結びつきとの関係

生年 学生別 分類	1944				1945				1946			計 (名)	%
	E	S	H	M	E	S	H	M	E	H	M		
本 籍 地	10	7	14	0	11	10	7	2	3	1	1	66	21.4
本籍地兼現住地	4	2	0	0	3	2	3	0	1	0	0	15	4.9
当時の現住地	15	15	7	0	5	6	5	7	3	1	2	66	21.4
父の転勤地	7	15	13	0	11	10	10	0	3	2	2	73	23.6
疎 開 地	1	4	2	1	12	2	22	6	2	6	3	61	19.7

母 の 実 家	1	6	0	1	4	2	4	2	0	0	1	21	6.8
祖父の居住地	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2	0.6
罹災後の仮住居地	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	0.6
其            他	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3	1.0
計	39	50	36	2	47	32	51	17	13	11	11	309	100
	1   2   7				1   4   7				3   5				

本籍地66名 (21.4%)、本籍地兼現住地15名 (4.9%)、現住地66名 (21.4%)、父の転勤地73名 (23.6%)、疎開地61名 (19.7%)、母の実家21名 (6.8%)、其他である。以上の分類を総括すると、出生当時の現住地と推定可能の者は154名 (49.8%)、疎開地152名 (49.2%)、其他3名 (1.0%)となる。其他とは不適當なる解答者を意味する。

#### (4) 出 産 状 況

次表の如くである。

第4表 神戸女学院大学生 309 名の出産状況

生 年 学生別 出産状況	1 9 4 4				1 9 4 5				1 9 4 6			計 (名)	%
	E	S	H	M	E	S	H	M	E	H	M		
満期自然安産	37	49	33	2	42	28	45	15	13	5	11	280	90.6
満期人工難産	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0.7
満期安産・双胎児	0	0	0	0	0	0	0	2	0	4	0	6	2.0
満期・骨盤位	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0.32
満期仮死産	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0.32
満期人口産 帝王切開	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0.32
過期安産	0	1	0	0	1	1	1	0	0	0	0	4	1.3
過期・骨盤位	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.32
早産	2	0	2	0	1	2	1	0	0	2	0	10	3.2
早産・骨盤位 未熟児	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.32

早産・人工産・ 仮死未熟児	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.32
早産・胎盤剝離	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.32
計	39	50	36	2	47	32	51	17	13	11	11	309	100
	1 2 7				1 4 7				3 5				

日本における 1944~1946 年迄の国家的統計は欠損しているので不明であるが、人口 1,000 に対する出生率は 1943 年は 30.2、1947 年は 34.3 といわれ 1963 年は 17.2 を示している。<sup>(2)</sup> 又、出生 1,000 に対する死亡率は次の如くである。<sup>(3)</sup>

年 度	全国的死亡率	市部死亡率	郡部死亡率
1943	87.0	78.2	92.0
1947	76.7	70.4	79.5

出産の種類には各種の分類法があるが、先ず妊娠期間で分類すると、満期産は 291 名 (94.2%)、過期産 5 名 (1.6%)、早産 13 名 (4.2%) である。次に異常の有無から分類すると、正常産は 280 名 (90.6%)、異常産 29 名 (9.4%) である。尚出産介助を推定しうる者は意外に少く、人工産の 6 名 (1.9%) がみられるが他は一応自然産とみなされ 303 名 (98.1%) である。

209 名中には一卵性の双胎が 3 組で 6 名含まれている。

#### (5) 乳児期の栄養方法

母乳栄養、混合栄養、人工栄養に分類すると次の如くである。

第 5 表 神戸女学院大学生 309 名の乳児期の栄養方法

生年 学生別 栄養法	1944				1945				1946			計 (名)	%
	E	S	H	M	E	S	H	M	E	H	M		
母乳	26	32	27	2	33	23	37	9	0	5	10	204	66.0
混合	11	10	6	0	12	7	13	7	11	5	0	82	26.6
人工	2	8	3	0	2	2	1	1	2	1	1	23	7.4
計	39	50	36	2	47	32	51	17	13	11	11	309	100
	1 2 7				1 4 7				3 5				

母乳栄養は204名(66%)、混合栄養は82名(26.6%)、人工栄養は23名(7.4%)を示した。

東京都の調査によれば母乳栄養71%、混合栄養21.5%、人工栄養7.5%を発表している。これらの数字は戦後10年間の割合に於ては殆んど変化をみない。<sup>(4)</sup> この割合は地方に於ては多少異なり、農村では母乳栄養が78%、混合栄養17.4%、人工栄養4.6%を示した例もみられる。今回の調査の結果は上記に比して母乳栄養はやや少なく、人工栄養児は殆んど変化がなく、混合栄養がやや増加していることを示している。人乳は乳児の生命を維持するところの無二の食物と信じられている。現在人工栄養が急速に盛んとなり、昭和38年度の東京女子医大の発表は47.3%を示しているが、<sup>(5)</sup>なお今日の化学では母乳と全く同じ調乳をつくりだすことは不可能である。かつ母親の愛撫を全身に感じながら育った子供は心理の深層において何かちがった物を持つであろうと松田氏は述べている。<sup>(6)</sup>物資欠乏と食糧難の当時は今日に比してはるかに母乳を与える努力が覗がえるし、不幸にして人工栄養に依存せねばならなかった場合の悲壮さは保育者にとって大変なことであつたと推察する。

## (6) 離乳の時期

309名に関する離乳をほぼ完了した時期は次表の如くである。

第6表 神戸女学院大学生309名の離乳完了の時期

<div> <div>生年</div> <div>学生別</div> <div>離乳時期</div> </div>	1944				1945				1946			計 (名)	%
	E	S	H	M	E	S	H	M	E	H	M		
3カ月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.3
5カ月	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	2	4	1.3
6カ月	0	1	1	0	3	3	0	2	2	0	0	12	3.9
7カ月	3	5	1	0	3	2	4	1	0	0	0	19	6.2
8カ月	9	6	5	0	11	2	12	4	1	2	2	54	17.5
9カ月	3	2	1	1	4	2	2	0	0	1	1	17	5.5
10カ月	8	6	4	0	4	4	15	5	3	1	2	52	16.8
11カ月	1	1	3	0	3	0	1	0	1	0	0	10	3.2

12ヵ月	11	13	11	1	14	11	15	3	2	5	2	88	28.5
14ヵ月	0	1	1	0	1	0	0	0	1	0	0	4	1.3
15ヵ月	2	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	5	1.6
16ヵ月	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0.65
17ヵ月	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	3	1.0
18ヵ月	0	4	2	0	1	4	1	1	1	0	0	14	4.5
20ヵ月	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.65
24ヵ月	1	2	2	0	0	1	0	0	1	0	1	8	2.6
27ヵ月	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.3
36ヵ月	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.3
不 明	0	5	4	0	0	0	0	0	1	1	1	12	3.9
計	39	50	36	2	47	32	51	17	13	11	11	309	100
	1 2 7				1 4 7				3 5				

欧米では生後3～4カ月で添加食をはじめ、4～5カ月頃には母乳を止めて<sup>(7)</sup>いる。母乳を7カ月以後迄与えている例は米国では17%にすぎない。<sup>(8)</sup>日本でも遅くとも満1年ともなれば離乳の完了をみるべきである。生後5～6カ月をへてなお母乳栄養にのみ頼っていると様々の障害をひきおこすことは既知の如くである。しかし当時の社会的環境から、母乳の豊富な農村型の母親は1年以上2年迄も与えていたときいている。

本調査によれば12カ月で完了した者は88名(28.5%)で最も多く次いで8カ月の54名(17.5%)、10カ月の52名(16.8%)、7カ月の19名(6.2%)、9カ月の17名(5.5%)、18カ月の14名(4.5%)等々の順である。最も早く完了したのは3カ月の1名で、これは早産で混合栄養であったが幸い発育は標準位であったという。最も遅いのは36カ月の1名で混合栄養、乳児期の発育は悪くて消化不良症におちいていたという。以上から満1年以内に完了した者は計257名(83.1%)、以後の者は40名(13%)、不明と答えた者は12名(3.9%)である。

# (7) 乳児期の発育状態

乳児期の発育の良否をほぼ標準以上と標準以下に分類すると次表の如くである。

第7表 神戸女学院大学生 309名の乳児期の発育状態

生時 学生別 發育狀態	1944				1945				1946			計 (名)	%
	E	S	H	M	E	S	H	M	E	H	M		
標準以上	37	47	32	2	45	29	42	15	13	9	9	280	90.6
標準以下	2	3	4	0	2	3	9	2	0	2	1	28	9.1
不 明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.3
計	39	50	36	2	47	32	51	17	13	11	11	309	100
	1 2 7				1 4 7				3 5				

この項の評価は当時の妊産婦手帳を基準として記載したと考えられる。ほぼ標準からそれ以上と答えた者は280名(90.6%)、以下の者は28名(9.1%)、不明の1名をみる。

なお発育不良者の原因としては出産時にすでに早産などのハンディキャップをもつ者6名、栄養障害を出現した者16名、肺炎の1名、ジフテリアの1名、気管支炎の1名、不明の1名がみられる。

# (8) 乳児期の健康状態

健康状態を強健、良好(健康)、普通、虚弱等に分類すると次表の如くである。なおどの程度迄を虚弱の範囲に入れるかについては各人により相当大きなひらきがあるが、田中・渡辺氏の<sup>(9)</sup>(1)虚弱ではあるが著しい医学的病変を認めないもの。(2)病的状態にして病変の部分的徴候を呈するもの。(3)異常体質を思わせるもの。(4)発育不良及び栄養不良のもの。其他を参考にした。



第8表 神戸女学院大学生 309 名の乳児期の健康状態

健康状態	学年 学生別	1944				1945				1946			計 (名)	%
		E	S	H	M	E	S	H	M	E	H	M		
強健		1	5	4	1	7	1	2	1	1	1	1	25	8.1
良好		18	21	14	1	19	16	20	7	6	4	2	128	41.4
普通		17	21	15	0	18	13	21	7	6	6	8	132	42.7
虚弱		3	3	3	0	3	2	8	2	0	0	0	24	7.8
計		39	50	36	2	47	32	51	17	13	11	11	309	100
		1 2 7				1 4 7				3 5				

乳児期の健康状態について保育者の言によれば、「強健」と答えた者は25名(8.1%)であり、これは全く罹患経験をもたず発育も大変良好で身体状況の優秀なことを意味する。この25名の栄養方法を追究すると母乳栄養は18名、混合栄養は6名で人工栄養は1名にすぎない。

「普通」とは特に著明な疾患にも罹らないが、さりとて特に丈夫という程でもない状態を意味し、132名(42.7%)で分布状態は最も多い。

「良好」とは強健と普通との中間程度をいい、128名(41.4%)を示す。

「虚弱」は24名(7.8%)である。このうち出産時すでにハンディキャップを持つ6名は何れも早産であり、なかんずく不幸なのは、早産—骨盤位—未熟児、早産—人工産—暇死産等を背負っている。栄養方法では母乳が12名、混合が8名、人工が4名を示し、栄養方法とは無関係に虚弱児の出現することを知る。又、このうち6名は特別な疾病経験なしに何となく弱々しく発育状況も劣等であったと述べている。

#### (9) 乳児期における罹患状況

次表の如くであるが、軽度の感冒及び下痢症等は含まない。

第9表 神戸女学院大学生 309名の乳児期の罹患状況

生 年 学 生 別 罹 患 状 態	1944				1945				1946			計 (名)	%
	E	S	H	M	E	S	H	M	E	H	M		
罹 患 せ ず	33	45	30	2	38	25	47	14	11	8	8	261	84.5
乳 児 栄 養 障 碍	1	1	1	0	2	1	1	1	1	0	0	9	2.9
疫 痢	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0.32
腸 重 積 症	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.32
乳 児 脚 気	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.32
肺 炎	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	4	1.3
肺炎-百日咳-腸炎	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	2	0.65
喘息性気管支炎	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2	0.65
百 日 咳	1	1	1	0	2	0	1	0	0	0	2	8	2.6
麻 疹	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	4	1.3
麻疹-肺炎-膿胸	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0.32
麻疹-流行性耳下腺炎	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	2	0.65
麻疹-百日咳	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.32
麻疹-肺 炎	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.32
水 痘	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0.65
中 耳 炎	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.65
ジフテリア-中耳炎	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.32
外 耳 炎	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.32
結 膜 炎	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0.65
丹 毒	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.32
先天性心臓疾患	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.32
先天性股関節脱臼	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.32
計	39	50	36	2	47	32	51	17	13	11	11	309	100
	1 2 7				1 4 7				3 5				

乳児期に特に疾病と名のつくものに罹患しなかった者は261名 (84.5%)であり、当時の事情からみれば意外に健康者の多かったことは全く同慶にたえない。

疾病の経験者は48名(15.5%)であり、1種類の疾患にかかった者が40名、2種類が5名、3種類の連続罹患者は3名みられる。

最も分布の多いのは乳児栄養障碍の9名(2.9%)で、これには急性～慢性消化不良症乃至栄養失調症をも含むものである。この疾病は栄養方法にかかわりなく離乳期に多発しやすいものである。次いで百日咳の8名(2.6%)、肺炎と麻疹の各々4名(1.3%)、水痘、喘息性気管支炎、中耳炎、結膜炎の各々2名(0.65%)等々其他で19種類の病名がみられる。

肺炎、麻疹等をこの時期に感染することは、さらに麻疹—肺炎—膿胸、肺炎—百日咳—腸炎という如く連続発病をみることは虚弱児への形成を容易ならしめる不幸なる現象であり、生涯を通じて体質を劣等にする危険性がある。又、この時期にみる伝染性疾患は家族内感染が大部分をしめる。なお先天的のものとしては、先天性心臓疾患と先天性股関節脱臼の各々1名がある。

(10) 乳児期における特殊症状傾向の有無の実態は次表の如くである。但し生理的な吐乳は含まない。

第10表 神戸女学院大学生 309名の乳児期における特殊症状傾向

生 年 学 生 別 症 状 傾 向	1 9 4 4				1 9 4 5				1 9 4 6			計 (名)	%
	E	S	H	M	E	S	H	M	E	H	M		
な し	36	45	33	2	42	28	40	16	12	9	11	274	88.7
湿 疹	1	3	2	0	1	2	3	0	1	0	0	13	4.2
湿疹・自家中毒	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.32
湿 疹・夜泣き	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0.32
湿 疹・下 痢	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.32
湿 疹・発 熱	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.32
下 痢	0	1	1	0	1	0	5	0	0	0	0	8	2.6
便 秘	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	2	0.64
発 熱	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	2	0.64
感 冒	2	0	0	0	1	1	2	0	0	0	0	6	1.94
計	39	50	36	2	47	32	51	17	13	11	11	309	100
	1 2 7				1 4 7				3 5				

乳児期を通じて特別の症状傾向を何も思い当たらないと答えた者は274名(88.7%)、これに対してしばしば同種の症状を繰返し出現した者は35名(11.3%)である。

以上の症状傾向を総括すると、最も分布の多いのは湿疹の17名、次いで下痢傾向の10名、感冒傾向の6名、発熱傾向の3名、便秘傾向の2名、夜泣きの1名等である。

なお上表に自家中毒の記載をみるが、この本態に関しては体質異常説をはじめとして多数の学説があり、反覆して主として2~10才の神経質児に多いとされている。<sup>(10)(11)</sup>本例は既でに乳児期から出現したと述べているが恐らく離乳以後の急性消化不良症殊に消化不良性昏睡の場合の下痢を主徴として発熱を伴うところの嘔吐をもみたのではなかろうかと推定し、下痢の項に分類した。自家中毒<sup>(12)</sup>と症の鑑別は誠に困難な場合がある。

症状の数から分類すると1種の症状傾向を示した者は31名、2種は4名である。

以上から察するのによ、これら症状傾向の多くは<sup>(13)</sup>滲出性体質の現われを意味し、一部が神経過敏性体質と推定しうる。

#### (11) 幼児期の健康状態

離乳即ち満1歳以後小学へ入学する以前の年令期間における健康状態は次表の如くである。

第11表 神戸女学院大学生 309名の幼児期の健康状態

生 年 学 生 別 健康状態		1 9 4 4				1 9 4 5				1 9 4 6			計 (名)	%
		E	S	H	M	E	S	H	M	E	S	H		
強	健	0	3	2	1	3	1	0	2	1	1	1	15	4.9
良	好	19	23	18	1	16	10	23	8	7	5	3	133	43.0
普	通	14	19	14	0	26	18	24	7	4	4	4	134	43.4
虚	弱	6	5	2	0	2	3	4	0	1	1	3	27	8.7
計		39	50	36	2	47	32	51	17	13	11	11	309	100
		1 2 7				1 4 7				3 5				

強健者は15名(4.9%)、良好者は133名(43.0%)、普通者は134名(43.4%)、虚弱者は27名(8.7%)である。

乳児期と比較すると強健は10名減、良好は5名増、普通は2名増、虚弱は3名増となり、強健者の減少が目につく。この現象は幼児期と密接な関係にある諸種疾患の影響であろう。

## (12) 幼児期における罹患状況

罹患の有無は次表の如くである。

第12表 神戸女学院大学生 309 名の幼児期の罹患状況

患罹	生年 學生別	1 9 4 4				1 9 4 5				1 9 4 6			計 (名)	%
		E	S	H	M	E	S	H	M	E	H	M		
	無	16	24	18	2	18	17	20	5	6	6	6	138	44.7
	有	23	26	18	0	29	15	31	12	7	5	5	171	55.3
	計	39	50	36	2	47	32	51	17	13	11	11	309	100
		1 2 7				1 4 7				3 5				

乳児期迄は家庭内での生活が主であったから家族内感染に重点をおけば伝染性疾患を防ぐことは大部分は可能であったが幼児期に入ると社会との接触が始まり、且つ交友関係が頻繁となるので幼稚園、保育所、其他において法定伝染病をはじめ色々の感染を受ける機会が多く、従って小児疾患も多種となる。前述の如く乳児期の罹患者は48名(15.5%)にすぎなかったが、今回は171名(55.3%)に及び3.5倍余を示し、これは調査全員の半数を越える。罹患の経験無しと答えたのは138名(44.7%)である。

罹患の経験者171名の記載した内容の実態は下表の如くである。個人別による疾病内容の詳細は紙面の都合上省略する。

疾 病 名	人 員	疾 病 名	人 員
疫 痢	4	小 児 喘 息	1
猩 紅 熱	2	気 管 支 炎	2
ジフテリア	3	扁桃腺炎	3
小 児 結 核	1	アデノイド	1
肺 浸 潤	1	中 耳 炎	10
肺尖カタル	1	胃腸カタル	11
肺門淋巴腺炎	4	(重症)	
肺 炎	12	自 家 中 毒	6
麻 疹	117	口 内 炎	1
風 疹	1	腎 孟 炎	1
水 痘	20	筋 炎	1
百 日 咳	49	骨 髄・骨膜炎	1
流行性耳下腺炎	23	骨 折	1
		先天性心臓病	1
		計	277

分布率の高いものを列挙すると、麻疹は 309名中の 117名 (37.9%)、百日咳は49名 (15.9%)、流行性耳下腺炎は23名 (7.4%)、水痘は20名 (6.5%)、肺炎は12名 (3.9%)、重症胃腸カタルは11名 (3.6%)、中耳炎は10名 (3.2%)、自家中毒は 6 名 (1.9%)、其他の順を示している。171名が記載した経験疾病の種類は26種類で延数は277件となる。これを疾病経験数から分類すると次の如くである。

疾 病 数	人 員	延 疾 病 数
1      コ	9 1	9 1
2      コ	6 0	1 2 0
3      コ	1 5	4 5
4      コ	4	1 6
5      コ	1	5
計	1 7 1	2 7 7

1 コの疾病を経験した者は91名、2 コは60名、3 コは15名、4 コは4名、5 コは1名である。

なお罹患後虚弱児につらなるような疾病歴の著明な実例として次の如きものがみられる。

麻疹—肺炎、麻疹—疫痢、百日咳—肺炎、結核—骨折、百日咳—流行性耳下腺炎—小児喘息、麻疹—流行性耳下腺炎—肺浸潤、肺炎—中耳炎—水痘—百日咳、水痘—麻疹—流行性耳下腺炎—中耳炎、百日咳—風疹—水痘—麻疹、自家中毒（再度）—麻疹—肺炎—流行性耳下腺炎（2回）、水痘—麻疹—百日咳—自家中毒—喘息性気管支炎等々。このような幼児の疾病が連続罹患を重ねてゆくことは幼児の発育に障害をおよぼし、保育者の絶大な努力にかかわらず幼児の心身の保健状態を劣等に導かざるをえない。

### (13) 乳児期における特殊症状傾向の有無

次表の如くである。

第14表 神戸女学院大学生 309 名の乳児期における特殊症状傾向の有無

生年 学生別 症状傾向	1944				1945				1946			計 (名)	%
	E	S	H	M	E	S	H	M	E	H	M		
無	25	42	30	2	35	25	42	15	11	10	6	243	78.6
有	14	8	6	0	12	7	9	2	2	1	5	66	21.4
計	39	50	36	2	47	32	51	17	13	11	11	309	100
	1 2 7				1 4 7				3 5				

症状傾向を特に認めなかったと答えた者は乳児期には 274名 (88.7%) であったが、今回は 243名 (78.6%) であり、31名 (10.1%) の減少をみた。症状傾向を認めた者は66名 (21.4%) で、その実態は次の如くである。

症 状 傾 向	人 員	症 状 傾 向	人 員
感 冒 → 気 管 支 炎	2 2	乗 物 酔	2
胃 腸 炎 → 自 家 中 毒	1 3	頭 痛 ・ 盗 汗 等 の 疲 労 徴 候	2
自家中毒・気管支炎・湿疹	1	不 眠 症	1
扁桃腺肥大 → 発熱	1 1	足 関 節 疼 痛	1
発 熱	8	麦 粒 腫	1
耳 の 炎 症	4	計	6 6

感冒気味から気管支炎傾向をしばしば示す者が最も多くて22名、次いで胃腸  
 障碍から自家中毒をひきおこしやすい者14名、扁桃腺肥大をしばしば出現して  
 発熱を伴う者11名、発熱をしやすい者8名、耳の炎症を繰返す4名其の他であ  
 る。なお自家中毒の内訳としては、アレルギー症状を出現する者(3名)か  
 ら、週期的に発熱一嘔吐一下痢を伴うもの(9名)、更に痙攣を生じる者(2  
 名)等を含めている。

乳児期にしばしばみられた滲出性体質はやや減少し、且つ症状の型を変えて  
 の存続が推定されるし一方神経過敏性体質の徴候が増加し又一部は神経関節性  
 体質への移行もうかがえる。

#### (14) 幼稚園或いは保育所等の経験

309 名についての私立、国・公立幼稚園或いは保育所の経験の有無は次表の  
 如くである。

第15表(1) 神戸女学院大学生 309 名の幼稚園或いは保育所の経験の実態

生年 学生別 経験	1944				1945				1946			計 (名)	%
	E	S	H	M	E	S	H	M	E	H	M		
無	4	10	8	0	9	5	8	1	1	2	1	49	15.9
有	35	40	28	2	38	27	43	16	12	9	10	260	84.1
計	39	50	36	2	47	32	51	17	13	11	11	309	100
	1 2 7				1 4 7				3 5				

経験を有する者 260 名の内訳は次の如くである。

第15表(2) 経験所有者の実態

種 類		生 年 學 生 別		1 9 4 4				1 9 4 5				1 9 4 6			計
				E	S	H	M	E	S	H	M	E	H	M	
私立幼稚園	1 年 保 育	11	12	6	2	12	10	9	6	3	4	5	80		
	2 年 保 育	10	6	5	0	11	4	7	5	5	0	2	55		
	3 年 保 育	0	3	0	0	3	0	2	0	0	0	1	9		



国・公立幼稚園	1 年 保 育	4	6	10	0	6	7	15	2	1	4	1	56
	2 年 保 育	5	8	7	0	2	5	7	3	1	1	1	40
	3 年 保 育	2	1	0	0	1	1	1	0	0	0	0	6
私立保育所	1 年 保 育	1	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	5
	2 年 保 育	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
国・公立保育所	1 年 保 育	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2
	2 年 保 育	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
其 他	公立幼稚園と私立 保育所を同時に1 年間	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	私立幼稚園に1年 公立幼稚園に1年	0	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	3
	私立保育所に2年 公立幼稚園に1年	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
	公立幼稚園に1年												
計		35	40	28	2	38	27	43	16	12	9	10	260
		1 0 5			1 2 4			3 1					

以上を総括すると、小学校へ入学以前の幼児教育歴は幼稚園乃至保育所において1年保育を受けた者は144名(46.6%)、2年保育は100名(32.4%)、3年保育は16名(5.1%)で合計260名(84.1%)である。全くの無経験者は49名(15.9%)であり、これの多くは疎開地等で近辺に適当な施設が無かったことを述べている。

次に保育経験者の内訳を区分すると、私立幼稚園は144名、国公立幼稚園は102名、私立保育所は6名、公立保育所は3名、其他5名である。

昭和40年度における神戸市の幼稚園の普及率は、小学校1年生100人のうち卒園者が75%<sup>(14)</sup>(全国平均は37%)であるし、又神戸市教育委員会の発表によれば、昭和41年度小学校入学生の幼稚園比率は81%の現状にあると述べている。従ってこれらと比較して、本調査の価は251名で81.2%を示したから、あの当時の国情のもとで如何に幼児教育に心をくばった家庭が圧倒的に多数であったかが証明されている。

## IV 結 論

現在休学生を除いて神戸女学院大学には終戦の1945年生れが 256名、1944年生れが 260名、1946年生れが 271名在籍する。このうち 309名についての出生から幼児期迄の保健状態は次の如くである。

### 1. 調査人員構成

1944年生れの者 127名、1945年生れは 147名、1946年生れは35名で合計 309名である。これを学生別にすると英文学科生99名、社会学科生82名、家政学科生98名、音楽学科生30名となる。

### 2. 人口上からみた出生地の分布状態

大都市生れが88名 (28.5%)、小都市87名 (28.1%)、町84名 (27.2%)、村49名 (15.9%)、其他 1名である。

### 3. 出生地と生活上の結びつきとの関係

現住地で生れた者 154 名 (49.8%)、疎開地 152 名 (49.2%)、其他 3 名 (1.0%) である。

### 4. 出産状況

満期産は 291名 (94.2%)、過期産 5 名 (1.6%)、早産13名 (4.2%) を示す。且つ正常産は 280名 (90.6%)、異常産29名 (9.4%) であり、これは自然産 303名 (98.1%)、人工産 6 名 (1.9%) と推定される。なお一卵性双胎が 3 組ある。

### 5. 乳児期の栄養方法

母乳栄養は 204 名 (66%)、混合栄養は 82 名 (26.6%)、人工栄養は23名 (7.4%) である。

### 6. 離乳の時期

満 1 年以内に離乳を完了した者は 257 名 (83.1%)、以後の者は 40 名 (13%)、不明者は12名 (3.9%) である。

分布の最も多いのは 12 カ月の 88 名 (28.5%)、次いで 8 カ月の 54 名 (17.5%)、10 カ月の 52 名 (16.8%)、等々の順である。最も早いのは 3 カ月の 1 名、最も遅いのは 36 カ月の 1 名である。

## 7. 乳児期の発育状態

ほぼ標準以上を示した者 280名 (90.6%)、標準以下の者28名 (9.1%)、不明と答えた者 1名 (0.3%) である。

## 8. 乳児期の健康状態

強健者は25名 (8.1%)、良好者は 128名 (41.4%)、普通者は132名 (42.7%)、虚弱者は24名 (7.8%) である。強健者は母乳栄養児に多いが、虚弱者は栄養方法に無関係に出現する。

## 9. 乳児期における罹患状況

罹患しなかった者は 261名 (84.5%)、罹患の経験者は48名 (15.5%) であり、計19種類の病名がみられる。

最も分布の多いのは乳児栄養障碍の 9名 (2.9%)、次いで百日咳の 8名 (2.6%)、肺炎と麻疹の各々 4名 (1.3%) 等々の順である。

1種類疾患の経験者が40名、2種類が 5名、3種類が 3名みられる。なお先天性疾患所有者が 2名ある。

## 10. 乳児期における特殊症状傾向

「無し」と答えた者は 274名 (88.7%)、「有り」は 35名 (11.3%) である。

最も分布の多いのは湿疹傾向の17名、次いで下痢傾向10名、感冒傾向 6名、発熱 3名、他の順である。以上の症状傾向は渗出性体質、神経過敏性体質を意味する。

## 11. 乳児期の健康状態

強健者は15名 (4.9%)、良好者は 133名 (43.0%)、普通者は134名 (43.4%)、虚弱者は27名 (8.7%) である。

乳児期に比して強健者の減少が著明である。

## 12. 幼児期における罹患状況

罹患経験の「無い」者は 138名 (44.7%)、「有り」は 171名 (55.3%) である。なお罹患経験者数は乳児期の 3.5 倍余を示す。即ち疾病 26種類、延数 277 におよび、1 コの疾病の経験者は91名、2 コは60名、3 コは15名、4 コは 4名、5 コは 1名である。疾病の主なるものを挙げると、麻疹 117名、百日咳

49名、流行性耳下腺炎23名、水痘20名、肺炎12名、重症胃腸カタル11名、中耳炎10名、自家中毒6名其他である。

### 13. 幼児期の特殊症状傾向

傾向「無し」と答えた者は243名(78.6%)で乳児期に比して約10%の減少をみた。

「有り」は66名(21.4%)である。

最も多数みられた症状傾向は、感冒気味から気管支炎傾向を示す22名が目立ち、次いで胃腸炎から自家中毒発生傾向の14名、扁桃腺肥大から発熱をみる11名、発熱を主徴とする8名、其他である。

### 14. 幼稚園或いは保育所の経験

全く経験の「無い」者は49名(15.9%)、「有り」は260名(84.1%)である。「有り」の内訳は1年保育を受けた者は144名(46.6%)、2年保育は100名(32.4%)、3年保育は16名(5.1%)である。

## V 文 献

1. 野辺地慶三	公衆衛生概論	頁 38	1965
2. 同 上	同 上	頁 23	1965
3. 田中正四・渡辺嶺男	公衆衛生学入門	頁143	1957
4. 斉藤文雄	母性及び小児栄養	頁127	1964
5. 東京女子医大	神戸新聞(赤ちゃんの素質を伸ばそう) 9月15日(水)夕刊		1965
6. 松田道雄	日本式育児法	頁 82	1964
7. 遠城寺・高井・其他	小児科学	頁 56	1958
8. 梁井昇・松本寿通	小児保健研究 22巻(1)	頁 36	1964
9. 田中・渡辺	公衆衛生学入門	頁158	1957
10. 水野四郎・其他	全科臨床医典	頁 75	1957
11. 小川鼎三・其他	医学大辞典	頁420	1955
12. 有田不二・其他	小児科学テキスト	頁171~174	1959
13. 宮崎 叶	母子保健叢書(小児編14) 体質異常		1959
14. 神戸新聞	昭和40年9月2日(木)夕刊(6)		1965
15. 神戸市教育委員会	「幼児教育の対策」昭和40年9月会議々案書 頁 22		1965

## **The Sanitary Condition of the Students Who were Born Before and After the End of World War II**

### **Résumé**

#### **Part I**

##### **The Actual Condition from Birth up to Infancy**

Those babies who were born before and after 1945 (the year of the end of World War II) are now grown to sophomores or juniors in college. In those days Japan was in the depth of misery. It is a well-known fact that the environment of their lives, the food conditions, the housing problems and clothing were at a low ebb. These girls were born during this confusion and bore the wants through their infancy.

Furthermore, in the medical world, there were few meetings for reading of papers on subjects studied, and academic magazines discontinued their issues. Also there are no national statistics of the period. For that reason there are many unknown factors for those years.

Therefore I wished to know under what kind of health condition they grew. Fortunately I was able to study very interesting record investigations on the subject of the health condition of 309 Kobe College students. In this account of limited space, I shall report here the actual condition from their birth to their infancy in Part. I.